「旧いアルバム」より～

『1956年の設計部の面々』

1956年（昭和31年）
設計部　全員集合！！

入社後は、芝浦工場にあった本社の一角で仕事をしていました。その後、2階建ての建物が新築され、その2階が我々の職場になりました。当時は8時15分から16時15分が勤務時間で、残業開始までの15分間の休憩時間に夕食を済ませ、19時まで残業する毎日でした。（松岡亮一 さんの手紙より）

1956年（昭和31年）
芝浦工場に併設された本社の正門にて

1956年当時は、現在の取手工場は存在せず、東京都港区の芝浦にあった芝浦工場が会社のメイン工場でした。
1922年（大正11年）に深川から移転してできた芝浦工作場が芝浦工場の前身で、それは半世紀後の1972年（昭和47年）に芝浦工場を閉鎖するまで続きました。

『私が入社した1956年（昭和31年）ごろは、学校ではリベット構造しか教えられていなかった。しばらくして、溶接構造が採用されるようになった。
溶接橋の設計というのは、計算はリベット構造よりも簡単で、図面を書くのも楽になりました。』（印鑰垣さん「社報」99号より）

『1958年（昭和33年）は、まだ独身寮もない頃で、下宿している者が大半で、下宿代を払うと当時の1金で千円ぐらいしか残らない。
それでどう過ごそうかというので苦労しました。』（栗林正憲さんの寄稿より）

1956年（昭和31年）

残業か終わると田町駅前の「のみたや」という飲み屋で1杯50円の日本酒2杯と1皿50円のおかずで3人分450円を支払い、それから国電で渋谷へ行き、どぶ川のそばにあった沖縄料理店「はなぞめ」でミミガー（豚の耳）の酢の物1人前50円をおかずに1杯50円の泡盛2杯ずつを飲んで帰る毎日でした。
（松岡亮一さんの寄稿より）

1960年代の初頭には空調設備など無かったので、夏は窓を開けて仕事をせざるを得なかったが、窓の外は仮組み立て場で、リベットをカシメる音がうるさく、埃や汗にまみれ、耳栓をしたり、バケツに水をくみ足を突っ込んで仕事する者もいた。設計計算では、足し算・引き算はそろばんで、掛け算・割り算は長さが70～80cm程の計算尺で有効数字は3桁であった。
その後、モンローやオリベッティーなどの電動計算機に続いて、手回しのタイガー計算機やキャノーラなどの電子式計算機が使われるようになった。
最初のキャノーラは加減乗除しかできないのに、大きさは小型のテレビ程もあり、1台が40万円もした。今日の100円ショップの品より性能が劣る物であっ

タイガー式のチンチンと音の出る計算機というものがありまして、その後デジタル式のモンローとかオリベッティといった計算機を経て、今日あるような電卓あるいはコンピューターへと移行してきましたが、「橋」を設計するということは、昔から決して変わっておりません。使う道具が変わったということです。その道具の使い方をを如何に理解するか、言い換えれば如何に道具を使いこなせるかが、我々に課せられた問題だと思います。

1959年（昭和34年）、初めて日本道路公団から受注したのが猪名川橋（3径間連続桁）で、これを変断面で計算することになったのですが、当時は全部手回しの計算機で行いましたので随分時間がかかりました。
（印鑰烜さん）（社報99号より）